
見習いなんだから、呼び名は執事（仮）

篠宮 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見習いなんだから、呼び名は執事（仮）

【Nコード】

N2938U

【作者名】

篠宮 楓

【あらすじ】

ある夜、ふざけた男に会った。

奴は言う、「三人目の我が主人、百八日間よろしくな?」。意味わかんないし、早く出て行けこのぼけがっ!

「三人の人間に百八日間仕えて来い」仕えているご主人様から執事になる為に出された課題。

それを遂行する為に、本人曰く日夜努力する執事見習いの闇狼ライラトと、三人目選ばれた紅子とのよく分からない百八日間。

完全に、ストックなしの当たって砕けるです（笑

一話の量は短い予定

1日目の1（前書き）

多分更新は、すっごいのんびり。

しかもファンタジーとか書いたことないので、きつととっても現実的な話になりそう（笑）

恋愛になる予定……は、未定？

ジャンルで悩んだけど、ファンタジーというにはおこがましく、恋愛というほど頭に浮かんでいない。

でも、きつと自分のことなので恋愛に進んでいくんだろうねと、ジャンル決定しました（笑）

1日目の1

1日目

「わお、今回はとってもキュートなお嬢さん！ 当たりだね！」
いえいつ！

両手を拳にして上に突き上げるようにして喜ぶ執事が、目の前に浮かんでる。

私は目を擦る事も忘れて、口をあんぐりと開けたままその人を見上げた。

……なんだろう、これ。幻覚かな。
立ったまま、夢見てるのかな。
私って器用だったんだなあ。

瞬きさえ忘れて呆然と見上げていた私の目の前に、執事（仮）がゆっくりと降り立つ。

「どうしちゃったの？ 我が主人」
片手を胸に片手を後ろに、そして軽く腰を折って挨拶する様は、まごうことなく執事だ。

日本にはあまり見ない人種だ。

いや、日本の上流階級にはいるのかもしれないけど。

私は日本に住んでる一般庶民なはずだ。

固まったまま動かない私の目の前で上体を戻すと、黒髪黒目の執事（仮）はにこりとステキな笑顔を浮かべた。

「今回のご主人様は、恥ずかしがりやさんなのかな？ それとも俺の魅力に言葉も出ないってことかな？」

「……………」
ナルシスト……
そんな事をどっかいった思考で考えながら。

黙ったままの私をご主人様ともう一度呼ぶと、するりと頬に手を滑らした。

「俺の名前は“ライラト”。はい、その小さな口で呼んでご覧？」

「……………」
呼べるか、ボケ。

身体は固まってるけど、脳内は動いてるみたい。

うん、絶好調ね。私の思考。

「うん、呼んでみるやボケ」

「……………」

頭の中、読まれてるよ！

というか、色的には日本人だけど顔立ちは西洋人なコノヒトに、ボケとかいって欲しくないかも！

せめて、“フール”とかっ！

「自分で自分を“愚者”とかいうの、反対にバカみたいだよ？ ボケ」

「何がライラトじゃ！ おのれは、ボケでじゅーぶんじゃあつ！」
あ、声でた。

思いつきり叫び倒したら、ついでに固まっていた身体も動くようになった。

よっしゃ！

くるりと回れ右をして、地面を蹴る。

スカートでどうかと思う全力疾走をかまして、十分後、私は自分のマンションに逃げ込んだ。

「俺の名を呼んだね？ 我が主人」

後ろから付いてこないか確認しながらマンションに入っていく私は、後に残された執事（仮）が呟いた言葉を聞く事はなかった。

聞いておけばよかったのか、聞かなくてよかったのか。

どっちにしても結果は変わらないだろうから、どうでもいいんだけど。

1日目の2

マンションの自分の部屋に逃げ込んだ私は、電気をつけずにカーテンの隙間から表を覗く。

つて言っても、道路は遙か下であんまりよく見えないんだけど。

だってここは見晴らしのいい、十階建てマンションの最上階一番端私みたいな小娘が一人で住んでるのもおかしいと思われるだろうが、そんなものだと思って納得してくれ。

……しないか。

ただ単に家族で引っ越してきたすぐ後に父親の転勤が決まって、泣きつかれた母親が「お父さんがかわいそうっ」とかいつて（っ）か性別逆じゃね？ 泣きつくの普通母親じゃね？）ついてっちゃって「えー、じゃあ俺、彼女と住むわ」とか言つて、弟は愛しのハニーのアパートに転がり込んでいった。

……あのさ、三LDKマンションに一人住まいのOLってどうよ。職業、愛人？ とか、事情を知らない人に言われたことあったりするんだから。

泣いて寂しがるヘタレな父親より、娘の世間体を考えろっていうのよね。

あの、万年いちゃこき夫婦め！

脳内でラブラブ両親に文句をつけつつ、溜息をついた。

一応見える範囲にはさっきの変な執事（仮）の姿がないのを確認して、カーテンを開ける。

都会だからそこまで星は見えないけれど、空に近い分、地面から見

上げるよりは綺麗だと思う。

「まあ、前の家からの方がよく見えたけどね」

溜息をつきながら、ベランダに出る。

手すりに寄りかかりながら、少し前に住んでいた家を思い出した。

ここよりも田舎で、程よく都会だった場所。

大きな川も河川敷も、広い公園も小さな山もあった。

子供の頃から慣れ親しんだ場所。

そこを父親の「都会に引越そう！」の一言で、こっちにてきた。まあ、私と大学生の弟の通勤通学を一番に考えてくれたみたいだけど、それにしたって！

おいてくかー、こんな越してきたばかりの都会に娘一人っ！ 乙女一人！

「乙女って言葉を、辞書で引いてみるといい。きっと、ご主人は当てはまらないから」

「……は？」

頭の上から聞こえてきた声に、体が強張る。

声？ 声って……

見たくない、見たくないと言文のように繰り返しつつ、確認しなきゃ気がすまないそんな感情に負けて顔を上げる。

ゆっくりと、恐る恐る。

上げた視界に、黒い革靴。

黒いスラックスの上に三つボタンの上着ももちろん、ベスト付。

白い肌に黒目黒髪。

モノクルを付けて、にっこりと笑う表情。夜空にぼおつと光って見える、その姿は。

「うっ」

「うっ？」

うめき声をまねされて、緊張が爆発した。

「うっ、うわあああっ！！」

叫び倒して部屋に逃げ込む。

後ろ手で窓を閉めて鍵も閉めて、ついでにカーテンを閉めてそのまま部屋の中を隅まで走る。

目の前にあったソファの背もたれに隠れながら、窓をじっと見つめた。

ちよつと、待つて。

ちよつと、待て！

ここ十階だから！

ありえないから、ベランダから声掛けられるのとか！！

浮いてたよねえ、あれ、浮いてたよねえ！

だって革靴見えたし！

いやいや、目に見えるものがすべてじゃない！！
現実逃避と言われても、それは結構だ！
認められん、認めんぞ！

「おバカなご主人だなあ、ちゃんと見えてるだろうに」

真後ろから声が聞こえてきて、びくりと肩を震わす。

思わず目の前のソファにしがみつきながら、声のしたほうを見上げた。

「……………！！」

絶句。

目を見開いて驚きに固まった私の目の前には、さっきと同じ様に人を小バカにしたような（いや、実際バカって言われたけど）余裕な表情。

するりと伸ばしてきた指先で固まっている私の顎を上げると、人差し指を額に当てた。

「我が主人、“三島 紅子”。互いに名を呼びここに契約成れり」

ぽうつと額に触れた執事（仮）の指先が光って、何かが頭の中を駆け抜ける。

その光が消えた後、執事（仮）はニヤリと笑った。

「契約終了」

ばかな私は、何が起きているのか分からなくても確実に自分にとって悪いことしか想像できないって言うのに、全く動く事が出来なかった。

「え、何？」

しかも声が出たのは、執事（仮）が指を私から離れた後。

「何、何の契約？ ていうか、なんなのよあんだ！」

おかしいもん、おかしいもん！

十階の部屋にベランダから上がりこんでくる人間なんかいないもんっ！！

子供に返ったような地団太を踏みながら、執事（仮）から離れる。

執事（仮）は目を細めて、自分の顎を手で触れた。

「いいかげん、執事（仮）ってやめない？ ていうか、ご主人て頭いいの？ 悪いの？ 口と態度は悪いの分かるけど」

私は手元にあったクッションを、思いっきり投げつける。

「あんたの方が態度悪いでしょ！？ 不法侵入なんだからね！？」
フホウシンニユウ？ と、カタコト言葉のように呟くと、くすくすと笑い出した。

その表情に、ぞくりと震えと共に冷や汗がどばつと吹き出る。

なんだろう、凄く嫌な気がする。
凄く、いやーな気分。

執事（仮）は片手で掴んだクッションをソファに戻すと、私の横に片膝をつけて座った。

「俺は執事見習い、闇狼の“ライラト”。ちなみに人間じゃないから、こっちの法律当てはまらないから」
「何、言ってる……」

信じたくない、認めたくないで頭の中で大音量な警鐘が鳴ってるけど。

事実だけを考えれば、とりあえず普通の人間じゃない事は確かだ。

ぱくぱくと口を開け閉めしていたら、ニヤリとその口端がゆっくりと持ち上がった。

そこに覗く、八重歯より鋭そうな歯。

「三人目の我が主人、百八日間よろしくな？」
見上げてくるその目は、なぜか赤く光っていて。

射抜くようなその視線に、流石の私も緊張がぷつぷつりと切れた。

ねえ、とりあえず、女の子らしく気を失ってもいい？

「女の子だなんて、女の子に失礼だよ」

お前が一番失礼じゃ、ぼけえ……

緊張と共に、私の意識も、そこで途切れた。

2日目 朝の1

「はあい、我が主人。お目覚めが俺のステキ過ぎる顔で、最高だろ」
「……」

昨日のことは夢オチで片付けられないかなと目を開けるまで祈っていたのに、視界良好な私のどまん前に執事（仮）がいるってどうよ。せめて寢室のドアの向こう、リビングにいるよ。

なんなの？ 余計なものはよこすくせに、私の願いは聞き届けないってこと？

ちよつとここに神様、呼んで来い。

昨日と同じ服装の、昨日と同じテンションな執事（仮）は片手に持ったティーカップを、ソーサーごと私に差し出す。

「見惚れても仕方ないけどそろそろ起きないと。我が主人、アーリーモーニングティをどうぞ」

もーにんぐてい……、もーにんぐてい？

モーニングコーヒーじゃなくて、ティですかい。

いや、私もどつちかというと朝は紅茶派なんだけど。

しかもアーリーって。今何時かよくわかんないけど、少なくともアーリーじゃない事は確かだ。

こりゃ参ったね。

はあ、とわざとらしく溜息をつくのと、にっこり笑ってドアに向かってピシリと指をさした。

「執事（仮）、とりあえず出て行け。歯を磨くまで、私は一口たり

とも何も口に入れん」

「うっわ、思考だけじゃなくて言葉にもしやがった。執事（仮）って言いにくいだろ！ ライト様って呼べ！」

「どこの世界に執事を様付けする主人がいるってーのよ！ ばっかじゃないの？ とりあえず出て行け、ご主人様命令！」

紅茶を持っているから殴り飛ばす事もできず、表情と声音に怒りをこめて叫ぶ。

すると、奴の動きが止まった。

顔も見たくないとカーテンを閉め忘れていた窓に、目をやっていたら。

「……………いい」

ぼそり、と奴が何か呟いた。

「……………？ は？」

いい？

何だこいつと思いつつながら顔を上げると、目をキラッキラさせる奴と視線がかちあった。

……………あれ？ なんか微妙に、凄い微妙にめちゃくちや嬉しそうな顔をされてる気がするんだけど、何？ なんか、スイッチ入れた？

目を潤ませてふるふると震える奴の状態がはつきり言って気持ち悪く、私はそろそろと布団から出……………

「……………」

布団の下から出てきたのは、ああいや、期待させて悪いが思いつきり服は着てる。

朝チユンにはなっていないから、あしからず。じゃなくて。

昨日のスーツのまま。

あれ？ 私いつ寝たっけ？

おかしいな、布団に入った記憶がないんだけど。

「そりゃ俺が運んだからだよ。まったく殺しても死にませんみたいなオーラし時ながら、えっらそうに氣い失うとか……氣絶しましたっ」

途中から青筋立てた笑顔を浮かべたら、言葉尻がちっさくなってばそつと端的に答えた。

よし、それでこそ執事（仮）だ。

「で・て・い・け」

「もう一声!」

……

「出て行け、この悪趣味執事（仮）!! 主人命令!!」

なぜか幸せそうな顔をしてドアを出て行った。

……奴のスイッチが、いまいち分からん。

2日目 朝の2

のろのろとベッドから這い出して、スーツを脱ぐ。
ていうか私、よく寝れたなあ。

まあ、心なし体がギシギシするけどね。

半袖短パンに着替えて、寝室をでる。

すると鼻に芳しい、朝食の香り。

私の日常では、ありえない光景。

……なんとなく考えるところがあるけど、そこは今はスルーしよう。

洗面所に入って鏡の前に立つ。

鏡の中の自分を覗いた途端、あちゃーと額を片手で覆った。

化粧したまま、寝ちゃったよ。

あーあ、まーた会社で言われるなあ。

まあ、ベッドに入れてくれただけ感謝しよう。

さすがに男にメイク落としシートを使われるのは、どん引きだし。

きつとそのうち吹き出物がでるね、こりゃ。

（ハタチ越えたらニキビじゃないってホント？ 永遠の十代でいたいんだけど、だめかしら）

向こうで“おこがましいっ”とか聞こえたので、手元の化粧水の瓶（プラスチック製、後片付けを考慮して）を投げつけといたけどむかむかは治まらないね

顔を洗って歯を磨き基礎化粧品だけ軽く施すと、ごきごきと肩をほぐしながらリビングに戻った。

「どうぞ、我が主人」

すると待ち構えていたように執事（仮）が、スマート？ とは到底言えないような動作で椅子を引いてくれた。

「……」

見てくれだけかよ、完璧執事なのは。

ふう、と息をついてその椅子に腰掛けると、これまたタイミングをめっちゃはずして椅子を押しやがったものだから、膝がつくんの要領で座面に腰を下ろすはめになった。

「……見てくれ詐欺だな、執事（仮）」

ぼそりと呟くと、執事（仮）は淹れなおした紅茶をカップに注ぎながら唇をとんがらした。

「ホント口悪いよね、ご主人。しかも頑固。いい加減、名前で呼べよ。それとも小さい頭に見合った容量の脳みそじゃ、昨日の夜のことなんてすっかりどっかに消えてなくなってるわけ？」

「……あんたは性格悪いよね。私を怒らせたいの？ それとも追い出されたい？」

お互い冷笑中。

こぼこぼと紅茶をカップに淹れる音だけが、静かな部屋に響く。

「まあ、あと百七日だから、諦めて俺に世話させる。俺がアルテナ

様の執事になる為に」

「アルテナさまあ？」

またなんか、痛い名前が出てきたし。

そんなことを考えた途端、刺されるんじゃないかと思うほどの視線が飛んできた。

「アルテナ様を侮辱したら、お前、許さないからな」

「……ご主人様に、凄いいい様だな。崇め奉れ」

「本当の主はアルテナ様。紅子はセカンド」

紅茶を淹れ終えたカップを目の前に置いて、執事（仮）は余裕タツプリな表情でニヤリと笑う。

愛人とかじゃないんだから。

何そのセカンドって。

ふう、と聞こえよがしに溜息をついて、紅茶を飲む。

お、美味しい。

喉が渴いていたらしく、思わず一気にそれをあおるととんととソーサーにカップを戻す。

目の前には、ニコニコしながら立っている執事（仮）

ほら美味いだろう、褒めていいぞ。そんな幻聴が聞こえるけど、とりあえず無視。

私は執事（仮）を指差すと、ちょいちょいと下に向けて指先を振って向かいの椅子を示す。

「とりあえず立っていられると気になるから、座ってくんない？」

「執事だから、ご主人と同じ席に着くのは」

……今更だろ、思いつきり執事らしからぬ態度だと思っただけだね。脳内で散々悪態つきながら（もちろん聞こえてるのを前提で）、いいからとごり押しした。

「あなたは勝手に契約したとか何とか言ってるけど、私はそんなものした覚えはないわけ。だからとりあえず、私が納得してから契約を履行するという事で。とにかく、説明を求めます」

わっかんないことばっかだつての！
寝落ちしてなきゃ、同じ部屋の中にいさせないつてのよ！

「まったく、可愛いから当たりだと思っただけど、中身は男だったなあ、紅子こそ見てくれ詐欺じゃんか」

……何、がっくりしながら座わんのよ。失礼な。

渋々ながら椅子に座った執事（仮）は自分で紅茶をカップに注ぐと、これまた全くスマートとは言えない仕草でそれを飲む。

「じゃ、とりあえずあなたは何？ アルテナって何？」
机に頬杖をつきながらそう言うと、アルテナ様と言いなおさせられた。

………どんだけアルテナ命だよ。

2日目 朝の3(前書き)

ちよつと説明ちつくで長いです。

ここを乗り越えれば、遊んで書ける……気がする……っ。

2日目 朝の3

「アルテナ様は、俺達、人狼族の主なんだ」

飲み干し済みの私のカップに紅茶注いだ執事（仮）は、夢見る乙女状態で語りだした。

じんろうぞくのあるじのあるてなさまのことを！ じゃじゃーん！

あ、全部平仮名読みになった。

ていうかさー、もしこころへん（体の脇辺り）にゲーム的な文字が出るなら……

こころはあきれをとおりこして、どおでもよくなった！

……だね。

あ、”こころ”は私の名前だから。紅子と書いて”こころ”だから。べにこじじゃないから、そこよろしく。

と、ここまで全く話を聞いてないのに、執事（仮）はアルテナの話をひたすらしていて。いつもなら勝手に心の声読んで突っ込んでくるくせに。どんだけアルテナ好きだよとか、こっちが突っ込みたい。

「人狼族は各々属性があつて、俺は闇の力に長けた一族の一人」
おっと、ここはちゃんと聞いておかなきゃいけなさそうだ。
執事云々は置いておいても、情報は知りたい。
ていつか、すごい純粋な好奇心だけど。

さて、ここからは板書的に進めます。

まず、この執事（仮）の住む世界は、こことは違う世界らしいです。
おお、ふぁんたじー　ここで執事（仮）に殴られました。
並行していくつもの世界が存在しているらしくて、この執事（仮）のすむ世界では、他の世界と行き来する術が確立しているらしい。
まあ、いくつか条件があるらしいんだけどね。

で、この執事（仮）が住んでいる世界は、私達がファンタジーの世界でよく知っている”魔物”とか”魔獣”とか”悪魔”とか”神様”とか”天使”とか……まあそんな空想の産物が、うようよと暮らしているらしい。

「え、戦いとかないの？　だって悪魔と天使でしょ？　うようよ暮らしてるっておかしくない？」

天地開戦みたいな！

すると執事（仮）は、真顔で頭を振った。

「普通に不可侵の条約を結んで、暮らしてるけど。あ、人間もいるけど同じ様に。だって、痛い嫌じゃん」

狼の癖に、痛い嫌とか……。

うん、まあ戦争って嫌だものね。うん、いいことだわ。

そう思おう。平和主義だもの。

ただね。なんか天使と悪魔が仲良く暮らしてるって、想像つかないんですが。

しかもファンタジーの住人の狼が、痛い嫌とか、なんか気持ちが悪えるんですが。

「じゃあ、見に来るか？」

「遠慮します」

即答！

で、話を戻す。

執事（仮）の住む世界にはいろんな種族のコロニーがあるんだけど、こいつが所属しているのもその一つ。

人狼族が主として戴いているのが、月の神アルテナ。

人狼族は各々六つの属性（闇・光・水・火・風・土の力）のどれかを持って生まれてくるらしく、それはやはり血筋によって分かれる事が多いらしい。

それぞれに強い属性を持つ一族が、領地を治めてアルテナ様に仕え

ている。
そして、ここからが本題。

「俺は、闇を司る一族の次期当主。よーするに、跡継ぎって奴」
「へー、あんたみたいないな奴でも、跡継げるんだ」
即答したら、睨まれました。

跡継ぎである六人の次期当主は、十歳になると宮にアルテナ様の従者見習いとして上がるのが慣例となっていて。
十三歳までに従者、その後近習として仕える。
アルテナ様の下には、人狼族の他にも、吸血鬼とか……要するに夜行性の種族が所属していて。

その種族からも宮に次期当主が上がるから、競争率が高いらしい。
で、その中でたった一人、特別な役職につく事が出来る。
何十人もいる次期当主が、必ず目指すその役職。

それが、執事。

なぜに、執事？

「はあ？ 執事って、そんなに位の高い職業なの？ 使用人って事じゃない」

普通、宰相とか騎士とかなんかこう、もっとあるよね？！
思わず声を上げた私に、執事（仮）は、まあなと頷いた。

「宰相も騎士団長も確かにあるけど、やっぱり特別なんだよねー。執

事

いや、おかしいでしょ。

「え、だって絶対宰相とかの方が力とか利権とか、その他もろもろいっぱい持てそうなのに！」

ちなみに私の中のイメージは、

” お主も悪よのう、越後屋 ”

” 何をおっしゃります、お代官様。黄金色の最中でございますよ ”

” へっへっへ ”

の、お代官様な感じだけどね。

ていうか、何気に越後屋って、可哀想だよね。

賄賂贈る代名詞みたいに使われて。

「紅子の想像する宰相のイメージ、まったく違うけど。まあ、確かに力をもてるのは宰相だよな。でも、執事にしかない特権があるんだよ」

「特権？」

そんなに凄いの？

月の神とかいうんだから、神様の力をくれるとか？！

「物欲満載だな、今回の主は」

「まだ主じゃない、了承してない」

呆れた表情の執事（仮）は、はいはいと溜息をついた。

「特権は、唯一つ。しかも次期当主全員がそれを望んで、執事の座を狙ってる」

「なんなの？ 利権より望む特権って」

「それは……」

「それは？」

ためるなよ、早く言わんかい。

執事（仮）は、目の前に人差し指をびしっと立てて、格好良く（普段比二割増し）言い放った。

「アルテナ様のお傍に、ずっといられる特権！」

は？

思わず見開いたお目々はそのまま、執事（仮）を見つめる。

けれど執事（仮）は、私の呆けた状況なんぞお構いなしに、握りこぶしを作って滔々と語りだした。

「執事になる為に努力してライバル蹴落として、寝る間も惜しんで勉強してライバル蹴落として……」

ライバル蹴落としてはかりかい。

「やっと候補が二人に絞られたのに、アルテナ様に出された最終課題が……」

ちらり、と私の方を見遣って、執事（仮）が溜息をついた。

「三人の人間に百八日間仕えて来いだなんて、なんの拷問だよ。全然、アルテナ様に会えねーし」

「人間にしても、勝手に最終課題とかにされて凄いはた迷惑なんですけど」

しかも、百八日間って何？

何でそんなに、切りの悪い期間？

執事（仮）は頭を抱えながら、私の頭の中の疑問に答える。

「郷に入っては郷に従えだっけ？　なんか、百八がニホンの宗教で大事な数だとか言われた」

百八……？

ふと考え込んでから、顔を上げる。

「煩惱の数？」

あの、大晦日の除夜の鐘とか、あそこらへんがそんな理由で百八回じゃなかったっけ？

「ああっ？　煩惱ってなんだ」

郷に入ってはとか知ってるくせに、煩惱知らないのかよ。

「煩惱ってのは、……なんていうの？　ほら。よーするに……なんだろう」

なんとなく理解してるけど、それは何といわれるとよく分からない。ナイス無宗教日本人。

「まあ、汚れた心？ みたいな感じ？ あんた、煩惱満載だからそんな事最終課題にされたんじゃないのー」

「汚れた心！？ ふざけるな！」

突如立ち上がって机を両手で叩いた執事（仮）は、物凄い勢いで叫びだした。

「純粹にアルテナ様のお傍にいたいだけだ！ アルテナ様の手を取ってアルテナ様と共に歩いて、アルテナ様のお役に立って、アルテナ様の匂いを嗅いで、アルテナ様に命令されて、怒鳴られて、冷たく見られつつアルテナ様が寝た時も起きた時も笑う時も泣く時もいつでもお傍にいたいだけ！ ……なんだよ、その目」

なんだって……

思わず少し仰け反りながら、半目で執事（仮）を見る。

「煩惱満載じゃん」

ていうか、軽く変態……いやまごうことなく変態。

だからか、だからさつき怒鳴ったとき微妙に嬉しそうだったのか。だいたい役に立つとかそこはいいけど、手を取るとか命令とか……何よりも”匂いを嗅ぐ”ってなんだ？

「煩惱じゃない！ 憧れと言え！」

「いや、アルテナ様もあんたがそんなんだから、煩惱の数だけ仕えて来いって言ったんだよ」

思いつきり断定。

なんかアルテナ様に、同情してきた。

「そんな事ないっ！ じゃあ、三人の主って限定はなんなんだよ！」
執事（仮）の言葉を聞き流しながら、私の右手には携帯。

適当に仏教関係のケータイサイトを開きながら、その理由を見つけた。

「煩惱って、三つの種類に分けられるらしいよ」

ガーンと、いうカンペを横に掲げなくなるくらい、完璧なショック顔を晒した執事（仮）でした。

2日目 朝の4

「ほんとーですかー、アルテナさまぁー」

「うざい」

アルテナ様の真意（推測の上に憶測）に、執事（仮）は物凄いショックを受けたらしい。

ちよつとザマーミロて感じだけど、さすがにウザイ。

これはフォローしてやるべきか？

まあ、紅茶もおいしかったしね。

「もう一人の執事見習いは、どんな最終試験を言い渡されてるわけ？ あんただけじゃないんでしょ？ 試験うけてんの」

椅子の背もたれに仰け反っていた執事（仮）は、やる気なさそうに顔を上げた。

「あー？ もう一人い？」

こいつ……、殴り飛ばしていいかな？

私の不穏な心の呟きが聞こえたのか、腹筋に力を入れて上体を戻した。

「もう一人は、吸血族の次期当主、たしかーリムとかリディルとかなんかそんな名前」

「名前はいいよ。で、何の課題を科されてるわけ？」

んー、と小さく唸った後、面白そうに肩を震わせた。

「確か、禁欲三ヶ月」

「……はあ？」

爽やかに楽しそうに、乙女の前で言う言葉がそれ！

へたれていた表情は、ホンキで楽しそうに破願していて。

「吸血族って、標準仕様でエロいんだよ。食い物が多種族の血だからな。手っ取り早くもらうには、相手を落とすの方が早いだろ？」

「うっわ、さいてえ……」

血をもらう為に、相手を落とすとかどうよ。

思いつき顔を顰めたら、執事（仮）はそうか？ と首を傾げた。

「血を飲むために手当たり次第に異性を落とすよりかは、決まった相手に執着する方がよくないか？」

「へ？ じゃあ、標準仕様でそれでも相手が決まってるなら、禁欲三ヶ月でも別に我慢できるんじゃないの？」

別段課題ってほどの課題じゃないじゃん。

そーいうことしないで、血を飲ませてもらえばいいわけだし？

「だーかーらー。わかってねーなー」

分かるか！ 吸血族なんて！

「標準仕様でエロいんだって。血を飲んでも飲まなくてもそーいう事したいわけ。女好きなんだよ」

「やっぱ、最低」

「まあなー。俺もどうかと思うけど。種族の特徴だからな、仕方ない。そうそう、特に今回の次期当主、まだ決まった相手がいないから血を飲むのに苦労すんじゃない？ 禁欲だし？ 相手落とせないし？」

ぷぷつ、と噴出しながらテーブルを叩く様は、昨日の夜のあの怖い執事（仮）とは大違い。

イメージがころころ変わる人だ。

「まー、でもさー。あんたは合計三百二十四日も課題に掛けるけど、その吸血の人はたったの百日くらいなのね」

楽しんでいたところに水を差されたからか、面白くない顔をしてむすつと口をとがらかす。

「俺の方が前の課題が早く終わったんだよ。喜び勇んでアルテナ様のところに行ったら、褒めてもらえたけど最終課題が長くなった」
アルテナ様、確信犯だな（笑）

内心ほくそ笑みながら、私は小さく息を吐き出した。

「まあいいや。とりあえず話も終わったことだし、出てっくれな
い？」

なんでもないように椅子から立ち上がると、私はテーブルの上にあるティーカップを手を取った。

執事（仮）は驚いたようにがばつと私を見て、慌てて立ち上がる。

「ちょっと、待った！ 今、俺の話聞いたよな？ ちゃんと聞いたよな？！」

ティーカップを持っていた手を掴まれて、思わず眉を顰める。

「何よ。話は聞くとは言ったけど、誰も了承するとは言っていないわ
よ」

「うわっ、詐欺だ！」

「何言ってるのよ、見てくれ詐欺の執事見習いが」

ふんつと鼻息荒く顔を背けると、執事（仮）の手が私から離れた。
そのままずると床にへたり込む。

「へへっ、そーかい。紅子は俺が今まで頑張ってきたその月日を、無にしてくれちゃうわけだ」

「……私には関係ないわよ」

「うん、そーだよな。二人の主に使えてやっと最終課題をクリアできるって、喜んできたけど……。押し付けられる方はいいい迷惑だよな」

「最初からそう言っただけでしょうが」

「きつと課題に落ちたらもう二度と執事に立候補する機会なくなっちゃうけど、それは俺の力が足りなかったただけだもんな。そうだよな。悪かった、巻き込んで」

「……」

何よこの状態。

なんか、私、凄い悪者みたいなんだけど。

「アルテナ様選ばれたお前の所に来て、俺の好みだったからすげえ喜んだけど……。人間だもんな。狼に好かれても嬉しくないよな」
嬉しくないけど、なんか口にできないんだけど。

「いいんだ、うん。俺、リタイアするわ。無理やり言う事きかせんのも、お前に悪いし。今からでも、なんとか宮仕えできる枠くらいあると思うし」

ゆらりと立ち上がって、指先で空間に何かを描く。

すると、今まで黒かった執事（仮）の目が、赤く光った。

「ホント、迷惑掛けてごめんな？」

描き終えたのか、何もない空間に細く白い光の線が幾つも浮かび上がった。

「え、と。大丈夫、なの？」

なんか、私悪くないんだけど。本当に悪くないんだけど。

なに、この罪悪感。

奴に垂れた耳と、でろーんてなってる尻尾が見えるのは、幻！？
幻覚！？

執事（仮）は少し落とした肩を竦めて、ゆっくりと頷いた。

「うん、大丈夫。父上には怒鳴られるだろうけど、それは俺の力が足りなかっただけだから。紅子が気にすることじゃないよ」

ちよっ、止めてよ……。

その”拾ってください”ってプラカードが見える表情……っ！

「いや、でも、ほら。もしかしたらアルテナ様だって、他の課題をくれるかもしれないし」

あー、なんであたしフォロー中！？

人良過ぎでしょ！

「俺の代では無理かな？ まあ、願いは子供に託すよ」

うっ、うわっ、ちよっ……

執事（仮）は寂しそうに笑うと、白く輝いている空間に片足を踏み入れた。

魔界とかいう、彼の世界に帰るための扉なんだろう。

向こう側に見えるはずのその片足は、空間ごと切り取られているかのように何も無い。

「じゃ、紅子。もう会うこともないけど、二元気で」

「えっ、ちよっ、ちよっと待ちなさいよー！」

叫んでしまつてから、後悔した。

後悔したけど、ここまで後味悪く帰られても凄いい嫌なんですけど！

引き止められた執事（仮）は、ゆっくりと顔をこちらに向ける。

「いいわよ、分かったわよ！ 頷けばいいんでしょ？！ 仕えさせればいいんでしょ？！」

「でも、迷惑……」

「迷惑よ！ もっそい迷惑だけど、罪悪感押し付けられるのも最大限迷惑なのよっ！」

「でも、すぐに撤回するんじゃないの？」

「はあ？ 二こまで言ったら、するわけないでしょ！」

なんだか小さな子供を苛めている気分になつてきたんですけど！

執事（仮）は扉に手を掛けたまま、縋るような目で私を見つめた。

「じゃあ、名前、呼んでくれる？」

「は？ 名前？」

「うん、そう。執事（仮）じゃなくて、ちゃんとした名前」
なんで今更そんな面倒なことを！

ちっ、と舌打ちしたのが聞こえたらしい。

悲しそうな顔になって、扉の方に顔を向けた。

「うわわわわ！ わかつたつてば！ ライト！ ライトでしょ

！」

慌てて叫ぶと、ぴくりと肩を震わせたライトが、するするとその

扉から身体を戻して私の前に立った。

「我が主人、“三島 紅子”。互いに名を呼びここに契約成れり」

額に指先をあてると、私の頭の中を何かが通り過ぎていく。

覚えのある感覚と、聞き覚えのあるその言葉に、あー面倒なことになったとライラトを見上げたら。

「……！ あんた！」

ニヤリと笑う、ライラトと目が合った。

「ちよつ、何よあんた。態度がまったく違うじゃない！」

「紅子には、泣き落としが効くと思っただら案の定」

鼻歌を歌い出しそんなライラトに、ぷちん、と某袋が破けて爆発した。

「あんた、だましたわねえっ！」

「騙される方が悪いんだよ！」

手に持ったままだったティーカップを投げつけると、それはライラトに当たる前に宙で止まる。

「まあまあ、ほんの少しの間じゃねえか。よろしく頼むよ、三人目の我が主人」

ゆったりと流れるような動作で腰を落として礼をするライラトに、

思いつきり足を蹴りだす。

「無効よ！ 騙して契約なんて、無効だわ！」

契約破棄しなさい！と詰め寄ると、ライラトはにっこり笑ってムリとのたまった。

その瞳は、すでに黒に戻っている。

けれど、今の私にはそんなことに気付く余裕もない。

「昨日と違って主である紅子は契約を結ぶのを了承して、俺の名を呼んだ。俺は主人として紅子の名を呼んだ。期間が終わるまで、この契約は破棄できない。諦めるんだな」

確信的ライラトの言葉に、某袋どころか感情が吹っ飛んだ私に敵無し。

「ふざけんな、この腐れ狼めえっ！！」

こうして、人狼族のライラトと私、紅子とのくだらなくも面倒な日々が始まったわけです。

……前振り長くて、失礼しましたm - - m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2938u/>

見習いなんだから、呼び名は執事（仮）

2011年7月23日13時19分発行